翻刻

『好春自筆句集』

早稲田大学近世貴重本研究会
雲英末雄
伊藤善隆
二又淳

〈解題〉

はじめに

本稿では、『好春自筆句集』（仮題、元禄十年奥、へ五―六六八〇）を翻刻する。これは新出新収の資料で、数少ない元禄期の俳書稿本として貴重である。

書誌

書型…枡型本。
装丁…列帖装。
冊数…一冊。
表紙…薄茶色原表紙。一六・六糎×一八・六糎。表紙見返しには卍繋ぎを空押しにした金色の紙が貼られている。
外題…なし。
字高…一一・二糎（本文第一丁裏一行目を計測）。
行数…概ね毎半葉八行。
丁数…全百十六丁（墨付百十丁）。
奥書…「于時元禄十年／強圉大奮若除捻／向陽堂好春書」（九十四丁裏）・「于時元禄六年梅天下浣寂峯」（百十丁裏）。
備考…本文は一筆で書かれているが、内容は二部に分かれる。九十四丁裏までが「好春自筆句集」。九十七丁裏から百十丁表までが「秋夕和歌」である（なお、九十六丁裏には、落書きのように「とつくりと梅いけなをす初日かな」

の句が記されている）。なお、本書の筆跡は、雲英末雄『元禄京都諸家句集』の口絵に載る好春の色紙（永野仁氏蔵）の筆跡と比較して矛盾のないものである。

好春について

好春（慶安二年〈一六四九〉～宝永四年〈一七〇七〉）は、中江氏、のち児玉氏。字は宗悦。別号に向陽堂・汲谷軒。はじめ伏見に住み、元禄初年に京に移住。梅盛門だが、延宝期に宗因風の影響を受ける。元禄三年の『かつら河』では京の点者の一人として歌仙一巻に加点しており、この頃から宗匠として独立したものと思われる。元禄四年に剃髪。以後、京の主要俳家と交流した。元禄期の典型的な京俳家の一人。雑俳でも『住吉おどり』（元禄九年）『高天鶯』（同年）『ぬりがさ』（同十年）等に京点者として名をつらね、笠付や前句付の高点句が入集している。編著に『新花鳥』『左義長』、追善集に『花すゝき』（竹宇・水色編）がある。なお、好春については、雲英末雄『元禄京都諸家句集』（勉誠社　昭和五十八年四月）を参照されたい。

本書の特徴

形態的な面では、枡型本・列帖装である点が特徴として指摘できる。枡型本の俳書としては『おくのほそ道』が有名であるが、その数は少なく珍しい。近年発見された『俳風大横手』（西六編、延宝八年刊）が枡型本であったことは、記憶に新しいところである。また、列帖装の俳書も数は少ない。元禄期のものでは、『おくのほそ道』の柿衞本が知られている程度である。なお、『おくのほそ道』の場合は、芭蕉が中世の歌書や物語の写本の書型を意識した結果、枡型本、あるいは列帖装で制作されたと考えられている。

内容の面では、前句付・発句・連句を一書にまとめている点が特徴として指摘できる。俳諧・雑俳の両方に渉って活躍した好春の面目躍如たるところで、珍しい構成である。これは元禄の前句付流行を反映した結果であろうし、編者である好春の俳諧観もうかがうことができる興味深い特徴である。

ところで、雑俳には美麗に点を付けた清書巻に列帖装のものがしばしばある。とすれば、好春の場合は、芭蕉のように中世の歌書や物語の写本を意識したのではなく、雑俳の清書巻の体裁を取り入れて、本書を枡型本・列帖装で制作したのかもしれ

ない。

なお、「秋夕和歌」は全百五十二首。これは配列の順序や語句に異動があるが、すべて賀茂南柯の家集『弄璞集』所収歌である。すなわち、上野洋三・中西健治編『弄璞集　本文と索引』（和泉書院、平成五年一月）の番号により、本書所収歌の順序を示せば、376～495・517～524・526・525・527・2747・496～502・504～516となる。また、中西健治「『弄璞集』補注―「秋夕和歌」について―」（『相愛大学研究論集』八号、平成四年三月）によれば、この「秋の夕暮れ」歌群を収めた歌集として、『南柯秋夕百首』（大阪市立大学附属図書館森文庫蔵本）、『秋夕百五十首』（内閣文庫蔵本）がある。本書所収の「秋夕和歌」も、こうした伝本の一つとして、また好春と南柯（あるいはその周辺の人物）との関係を示すものとして興味深い。

おわりに

以上、『好春自筆句集』について簡単な紹介を記した。本書は従来知られていなかった元禄期の俳書であると同時に、体裁・内容の両面から見ても特徴的な存在である。元禄期の俳諧・雑俳を考える上で大変貴重な資料であると言えるだろう。

翻刻『好春自筆句集』

（きら　すえお　　）
（いとう　よしたか　湘北短期大学准教授）
（ふたまた　じゅん　明治大学非常勤講師）

付記

解題作成にあたり、賀茂南柯と『弄璞集』所収歌について、神作研一氏より御教示を得ました。記して感謝申し上げます。

雲英末雄先生は、平成二十年十月六日に急性骨髄性白血病のため急逝なさいました。

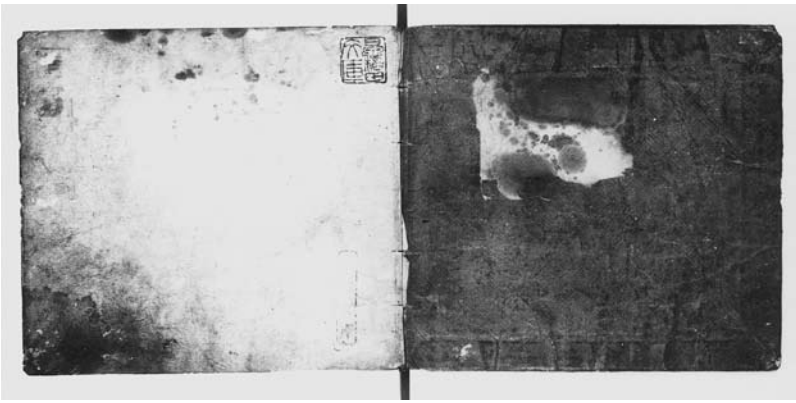
このたび紹介する『好春自筆句集』が図書館に収蔵されたおり、先生はたいへん喜ばれ、本紀要に発表することをご希望なさっていらっしゃいました。そのため、今回は先生のお名前を掲げることをお許しいただきたいと存じます。

ただし、解題・翻刻作成に際し、先生に目を通していただくことは叶いませんでした。すべての責は伊藤と二又が負うものです。

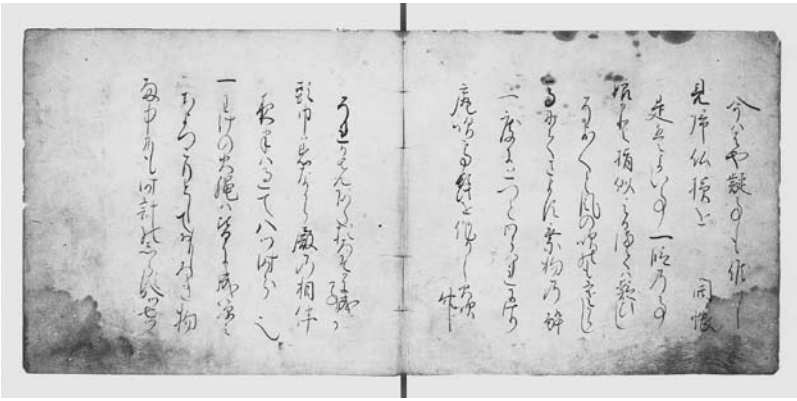
雲英先生のご冥福をお祈りいたします。

（伊藤善隆・二又淳）

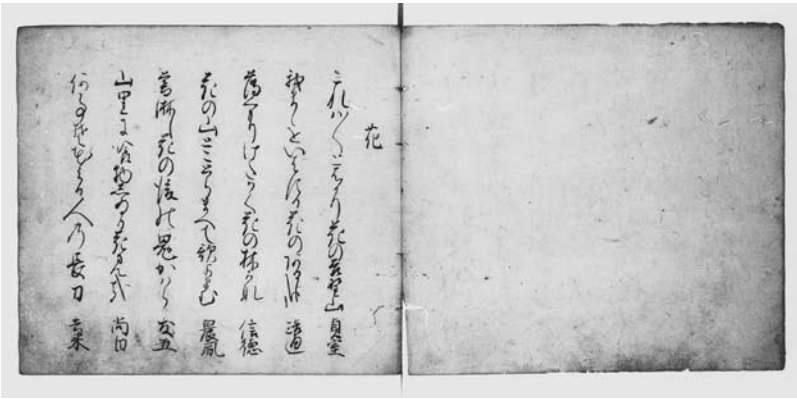
表紙



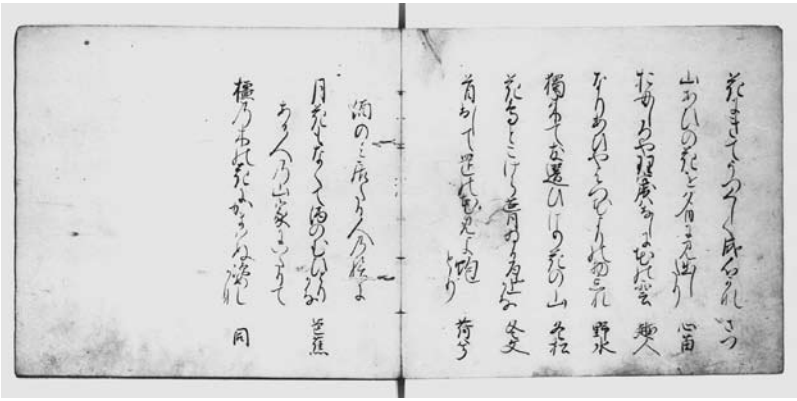
1オ　　見返し



2オ　　1ウ



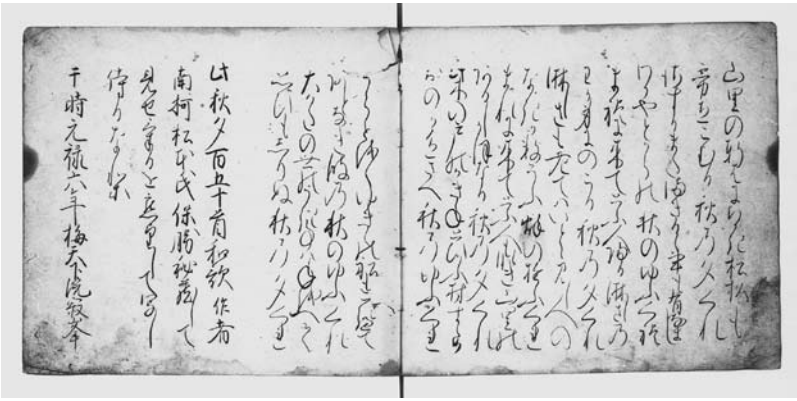
54オ　　53ウ



56オ　　55ウ

95オ　　94ウ

98オ　97ウ



110オ　109ウ

〈翻刻〉

（白紙）

今ははや疑事も候はじ
見帰仏横を開帳

是はよい事一段の事
娘かと指似みるまでは疑ひし

そよ〳〵と風の吹のも寒からじ
馬にてさます乗物の酔

一度にどつとわらはれにけり
尻吹て髭を作りし火吹竹

それが先あだおろそかに成事か
頭巾着ながら殿の相伴

夜半は過て八ツ時分也

」（一オ）

」（一ウ）

一わけの火縄は皆に成凉み

ちよつこりとしておもしろき物
雨中にも時計のしらす八ツ七ツ

雪のうへ中一筋に道つけて
袈裟かけてつく入逢の鐘

うれしけれども恥かしき也
二代まで何とて御座を直すべき

何もやろかもやらふとぞいはれける
鐘に門屋のむかし恋しき

あとからつきぬ物にこそあれ
きられても肉上でゐる蘭麝待

これは先過分な事と悦びて

」（二オ）

」（二ウ）

さゝやいて云道の待ぶせ
藁のあつまか尻のやねふき
影のうわさを耳引て云
家来もたねば頼むさかやき
隣の梅の垣を下られ
送り膳には初鶴の汁
藪なきさとへ送る竹の子
誰が着せしぞや酔醒のきぬ
古筆土産にもらふ歌の師
座頭の手ひく細き橋橋
上手と矢代組し賭的
御目に掛るは恥かしき宅
着て里廻る殿の紋付
柄杓に酒をうくる順礼
紙付て置草花の種
余所の子抱てみする相撲場
酒さす硯ゐてつかぬ水
義には甲をぬぐ敵の礼

」（三オ）

合羽出さぬ伊勢参宮
桜と蘭にやせぬ我顔
打乗て来る御馬一疋
紙子一反受る鉢の子
仕きせの外の御心づけ

」（四オ）

念を入たるうへに念いれ
一腰はおとこの公界道具なれ
親の像作るあいだは側さらず
文箱の内に印ありそとの封
約束の事を下緒に結ぶ紙
さか柱たつれば家のすいび也
蔵俵の中に名をかく椿の葉
きのふ葺藁屋の雨の一雫
人しらぬ印手の又字に針をうへ
名太刀は磨間すくなく目をかけて
削たる扇垂木の反かげん
ふきの葉に牡丹つゝみて縫松葉

」（三ウ）

」（四ウ）

馴にくや刀さす身の京住居
鞘口の早きにこりしかすり疵
春宮の御飯なめみる女中方
落字をばして手こりたる御祐筆
御通りのまへに石堀宿はづれ
家込の中に作りし新土蔵
鶯の摺餌にかけるきぬふるひ
御清めののしめ織目は別火にて
地下人に装束ゆるす鞠の詰
頼まれてケ条を多く書目安
勅封の哥書も土用の風はみん
天脉を御簾の外面にうかゞひて
撰れて高野大師に衣めさせ
慈悲とてもむさとは剃ぬ若女
御法度の名を受てする年貢講
木食も宗旨帳にはのぞかれず
下〻も御用といへば軽しめず
御成とて鳥の巣おろす花の山

」（五オ）

」（五ウ）

御膳部は一度〳〵に総簞笥
本あみが極依怙なき太刀刀
姿から其身と成し生絵かき
御朱印の置所なき身の冥加
人参の和は甘からず苦からず
御秘蔵の夜るの鶉の置所
あら鷹や飛鳥みせぬ紙袋
名を遂て御廟を守る二世の忠
□な火を加茂の生れはくはぬ也
針の数よみて御小袖したつべし
御物師の試られて縫小袖
風はめる焔硝蔵の土用干
雷の間を立さする大工ども
金壷を生る心はやすからず
物馴し其人撰ぶ使番
藁づとの水菜の中は金袋
御目見えの小性の髪をそろへけり
灸よりも墨付る間のきみわろし

」（六オ）

」（六ウ）

」（七オ）

先菅笠を脱て手に提
御代ならばかくは有まじ草の墓
うれしさは古郷の家の門ちがへ
旅人も珠数さへてやる棺縄
御祭日は出家もゆるす伊勢の神
宮犬の菓子貰ふ迄身にもつれ
幼名は長吉と仰上られよ
高野山鏡の井とは是成か
昔絵の社に残る縻馬
船着て合に上る剃鏡
見渡すに筆かる程の家もなし
鷹居し後通らぬ法にして
御車にどなた〳〵としらね共
三井の地に入より鐘を心がけ
幅広き川は渡しの間を取て
塩風に白みし浜の貝尽し
重衡の矢を見出する二王門

」（七ウ）

」（八オ）

此寺は許すか知らぬ女の身
稲荷山鳥井に扇投こさん
渡し場に船よぶ武士の供廻り
遁世の心なきする院の御所
言募る身は散際の山ざくら

」（八ウ）

のむとりとしておもしろや〳〵
かすみ汲行岑のかはらけ
女の折はゆるす花国
船で見にゆく船の乗初
馴付は水に蛙飼たし
妾にぬかす髭はいたまず
花にはかへし翫水の船
梅一輪に道のつく畑
殿さへ笠はめさぬ花道
花の衾をかぶる鴛鳥
朝日の海にうつる川さき
湯はなのいきに四手の散宮

」（九オ）

浪題目を拝む船中
羽根あるほどの小鳥囀る
馬士の哥より移る船哥
祖母様ばかり羽根つかぬ家

」（九ウ）

門さすといつもの所火ともして
鳥目やむ子にためす手づかひ
商人着し帳のあらため
足のはづみに廻る綿操
こまかにせよとたゝかする鴨
まめ打男布子着更る
大名の気に気をなしてみる
出こちけたるかつかぬ御鉄漿
とし往て嫌ふ父親のまへ

」（十オ）

目八分にぞかまへられける
背を客のかたへするぞや川の魚
勅使がた和尚がた迚児二人
小々性は諸傍輩にも物いはず
いたいけにゆびのとゞかぬ子の皷
鐃鈸の役をつとむる僧二人

」（十ウ）

思ひのまゝに成てうれしき
典薬とめさるゝ時はきる冠
かくし妻子のかはゆさに呼入て
奥といふ日から箒を手にとらず
夕食は生竈にて焼すべし
長宦を九人打こす身の誉れ
下屋敷半時早し月の□
七日づゝしたる芝居を常□居
おも蔵の口は居間からすぐ続
御本尊の油ぬかせて金表具
ほつこんと我に妾のもらふ隙
母のある内に請取花の寺
敬曰と筆を点じて書絵馬
我庵は如来のたてゝ給りし

」（十一オ）

逢てからしれたる文の書違へ
次郎まで似合の官のあがた召
勝方は足早に出る塀重門

」（十一ウ）

其程の早からずして遅からず
ありがたかりし小原称名
湯煎の酒の瓶に手をあて
古御本社はたてくさり也
くらを置ぬは神のめし馬
息子の□とけなりからるゝ
牛たゝかぬは御車の時
諷経の僧をおろす乗物
今日若殿の御袖なをされ
銀盤をしく伽羅の立やう
日ざし目あてにかゝす清書
名を取人は腰で乗馬
究めてことしわたすかんほう
碁笥のふたする音に出す膳

」（十二オ）

乗物わきにひつそふて行
御家久しき武家の食焼
板こうばいに瓦葺やね
日なたに氷釣て見て居る
所〴〵のかはる種かし
鐘をあいづに参る説法
軒見こされて桜一観槙
四十過れば髪おろす人
煎じ薬をはかる天目
算盤のあふ帳のよみくせ
三つめ〳〵にうみて乙丸
飛行鳥を射て落しけり
うき名のたゝぬ内の元服
小竹の筧庵に相応
師匠の太刀のぬきはなれ際
四つにはいつも御寝成殿
昼寝をすれば癖に成もの
見合てとれ相伴の箸

」（十二ウ）

」（十三オ）

」（十三ウ）

明日からと触るゝ御茶摘
兎角は躾は小笠原流
親にもらふて子に譲る家

」（十四オ）

明くれそばにをきて眺る
籠馴しあふむに妻の名を呼せ
追腹の末よけな気につぼむ花
借ものをわすれず返せ大三十日
口伝とは師にをくれたる物思ひ
朱と墨に図法師の筋を引分て
老の身の息助けたる炉の手吹
隠居へはよき暦をば送る御師
干切まで柚瓢の糸をとかずして
将監が書竹鶯の絵の火桶
唐本は筆雇に写しかへさせて
百菊の書たて空に覚えたし
誂て己が力にあふかたな
我思ふやうに出来たるたばこ盆

」（十四ウ）

風俗に都に似せむ雛形

」（十五オ）

ちらり〳〵と木葉ちる也
石燈篭油気ぬけし古社
つきはてぬ鐘の内には門さゝず
山住居其一年の馴にくき
在やうは寒さに略す神の拝
名をかすは梅の手がらの梅もどき
山居してとぼしきものは酒の友
堂までは二休みする谷の水
寒菊を住寺の留守を待つかひ
盃をとらぬ間はねぶからず
白張を張なをしけり神無月
肩熊に乗て御児の里がへり

」（十五ウ）

夜に入までは賑やかな事
しめ出しの果は大かた坊主にて
人心神やおかしき欲参り

」（十六オ）

旅立や我人文を一つ宛
背中へは階子をさして切鯨
皿わらぬやうに下知するあがり膳
凱陣をすれば命は拾ひもの
人からは謳て知る花もどり
家移りてまだ生壁に掛行燈
右に袈裟掛て居たりし牛祭り
よみ合す撰糸の棚のひかへ帳

」（十六ウ）

朝つくひ雨のあがりのつたひ道
やさしき家はからぬ鉢の子
仏具を洗ふ谷のしたゝり
脇ざしとがむまかりとの石
鳥居にすれて染る白張
隙ある身ほど花に隙なし
鉢場見おろす峯の庵室
のぼり出せとせがむ乙の子
ころもほころぶ岨のからたち

」（十七オ）

翻刻『好春自筆句集』

捨子に馬をとめてあはれむ
下馬よりかすむ千木のかたそぎ

何もやろかもやらふとぞいはれける
女冥加にかなふ我美目
抱たけれどもやゝの手ぎらひ
御手のかゝるを奥の御にくみ

」（十七ウ）

入ものに入て置ては取出し
師の打直す小鼓の癖
笛には残る父のゆび跡
妻のかた見に伽羅のかうがい
ゆるされねども茶匙の調合
下女の心にやさし夏の経

」（十八オ）

御名がきゝたし〳〵
二階より禿使の思ひざし
節会場の弓に掛たる裾の長さ

如意提し僧の答話の有難き
水上の日に結ぶりの替る髪
殿様と廻向をするも打つかず
加茂川やながれ渡りに行女
はだしにていかに女の滝詣
田螺さへ瘡おとせばいたゞきぬ
茄子にて立習ひたる稽古針

」（十八ウ）

うすきとこきと紅葉一めん
銭箱のなきは知行の有寺か
かくしても酒のまさぬが寺の疵
甘干は葛屋の軒にふすべられ
峯つゞき飢に望めば榧割て
観音の舞台はどれも懸作り

」（十九オ）

是は御巧者偖も御巧者
嶋台を出せば脇ざし集させ
一樽は煎酒成し伊勢参り

水入て茶碗に湿の程しらせ
蚊のために酒くさきもの釣座敷
精進をおとす所をすりぬけて
川中に瓜むいて喰立およぎ
さし留て命助くる牛の□

」（十九ウ）

金鎚のはづみに明る車錠
雫をば其まゝ点に書色紙
鯉のゐの後十五日上にあり
おくさまの寄進に袈裟をぬはせられ
奉加場は中でよふ咲花の陰
盗人をたすけ給ひし聞所
かゝりかね鈾二ツでとる釣瓶
金柑の色をかへぬは竹の内
祇園会につかふてみする独活鱠
算盤でいはねど合す年の数
庭広き砂の青海砂の嶋

」（二十オ）

雫ほち〳〵〳〵

奥様の藁で御髪をゆはせられ
雷にまことふとるか芭蕉の葉
蚫むく間は海士が一休
尺八は夜の更るほどおもしろし
石一ツ長者の臼と名に残り
日のあてぬ方はちいさき花の輪
三よし野の山は日影のうしろ向

」（二十ウ）

見つけ出したる事の嬉しさ
馬の背に延あがり度不二の山
真綿にてなづればかゝる蛇の針
此筒はまぎれもあらぬ親弥介
七日まで北野参りの日はつめず
書直す祝儀の状の起請つき
芝原や鳴の卵のあり所
信濃路や夜毎に下る星の石
三疋の蛙は国の一つもの
さび水の色なめて見る金の味

」（二十一オ）

見事成松見事成岩
作るべき菴に崇るな山の神
陸道のなきこそ疵よ竹生嶋
腰かける茶屋のあいそに茶を飲て
日のもとに三の湊のかゝり船
此里はたれも住たき水漏て
寺の名は柄杓にかいてをく清水
よばれても只喰れぬは寺の斎

」（二十一ウ）

殊の外早き事にて候ぞ
乞能にして見たる熊坂
腹のあしきは僧正の癖
誰が智恵付て染し御歯黒
千巻陀羅尼響く本堂
月みるまでは国二つ見る
御駕篭に添て書写す御意
初て牧の駒をとる役

」（二十二オ）

」（二十二ウ）

角在石のなき川原かな
生肴つみ送りやる船
皆曲水に浮るさかづき

不祥な事も有ならひ也
跡にまだ居て狂言に打皷
水もらふ人に我名を立られし
還俗につかねばたゆる親の跡
坂迎肴をたゝす寺の鍋
死の跡を直に弟の妻と呼
義理役に死人を送る注連の内
竹切の役にさゝれて袋入
常斎に嶋原へ行僧の役
万日の袋をつめる門徒衆
是非と云女寝さする庵の端
もらひ乳の寝入ばなをば扣く門

」（二十三オ）

野も山も皆よそ〳〵とよそ〳〵と
川さへこせば気の替る旅
汗をたすくる滝の明神
もとの味知初立の膳
蕗の萼喰て角落す鹿
札付てをく牛馬の数
傘干がてらさして行寺
御寺の菓子のかびる間もなし
古跡ばかりに道の一筋

」（二十三ウ）

さても御手ぎは〳〵
亭坊の二まい重ねて打温飩
日光の喰ものくふて帰る人
飛蚤を楊枝の先でおさへられ
鮟鱇の料理は縄を切はづみ
墨色の石に通りて裏面

」（二十四オ）

所望也是非所望也所望也
そなたの耳はちと動くげな

」（二十四ウ）

死ぬと一盃瘡の冷水
女鶴男霧を吹分る虚無
初の穴に又射込的
畑打やめて花の案内
旦那の小歌奥様の琴

手の働と足の働き
釈迦の代も金は無性に人くれず
口計とし寄残す酒の味
夭布を一箴ごとに云念仏
おどろくな馬士が喧咤は死に遠し
姑の笑顔みるまで茶を立て
薬代もならぬ貧者の申礼

」（二十五オ）

きれいにて幾間〳〵も在座敷
かくれ事にと小坊主の鬼
若子の機嫌を直す輩
楽する代にやかましき松

」（二十五ウ）

花に一日見する泉水
奥と見ゆるは中のとしかさ
冷たる膳にすはる御法事
蚊の足ためぬ風の吹ぬき
神酒のおさめは講の飛入
ふくさ〳〵に茶の勝手だて
家名いはねばしれぬ同名
店に幕打殿の御とまり
ちぎれ残りし花の短冊
恋にもかるく刀わきざし
御幸過てはゆるす花寺
鐘にせいある開帳の寺

」（二十六オ）

袖に取つき帯に取つき
大磯や賤の童の砂かへり
南門を開くは丑の時刻ぞと
はご板男がつくか余所をみよ
飽た子をうまずの目にはうらやまれ

」（二十六ウ）

気違のぬけて出たる座敷籠

思ひもよらぬ事にこそあれ

見物の中から出る女方

石灰に馬の背こがす俄雨

丸頭巾袖にもなきは神かくし

此僧に野郎の施主は過分也

喰てみれば寺の料理のなまくざし

十四にて口説にとらすひたひ髪

半金の余座にかゝりし初瀬寺

本膳の饅頭振廻はじめにて

川原火屋焼穴に居る大鯰

此座では酒の夏断をやぶらせん

法印を給はるうへに諸役まで

無病にて主の灸の御相伴

気の毒は若衆の腹に僧の御子

作介を恋になされし御姫様

」（二十七オ）

」（二十七ウ）

」（二十八オ）

是非ともと断いへば見する也

昔屋の裏に夕顔の墓

二またに咲いく玉の蓮

抱は芝居の木戸を入る子

絵師の名計残るぬけ竜

名高き寺の楠の天井

蛇を踏ころす聖宝の下駄

軽きを望む釣掛の升

」（二十八ウ）

粟田日の岡追分を過

高宮の頭巾天忘にくらべ買

水風呂に入間は肌を放す金

鈴なくは人のあたらん夜ルの馬

御呉服所に最早御暇下さるゝ

鈴のなき馬かりて聞ケ時鳥

酔の有内は涙も出ざりし

挑灯の心はぢきとる松の陰

」（二十九オ）

つい茶一ぷく呑間なり
軽き身の向ひの目をば留守させて
幕引と衣装をかへて出る役者
さい〳〵で御座れと下女を雇ひたし
打なぐり書に本絵の嫌らしく
女房のわらひに成し御しやれ餅
小判市何万両の手を打て
堪忍は気の取やうで成物ぞ
死ぬる日も常の如くに噺シして
かみ様に抱すも御乳が肩やすめ
立よれば名染て惜き雨やどり
宵の程余所の揚屋の月を見て
初咲の牡丹を犬にふみおられ
明ぼのに我身も知ず取みいら
下の町の玄徳殿を呼でこい
どうけ嫗(視とも)入ざる程のやすいさん

」（二十九ウ）

跡先に十四五日はかゝりけり

」（三十オ）

指替かりて刀剃する
戸板にのする水論の公事
負摺おろし札を合する
護摩にふすぼるごま堂の坊
書写し終りし法花八軸
大和廻りを二三人連
世捨ながらも菴の上塗

」（三十ウ）

にぎやかな事〳〵
王城は余国にたゝぬ雲の岑
見明すか花の梢の火の移り
峯入は貝の上手をえらばれて
さかづきを船から船へ投かへし
国〴〵の比丘尼熊野の年篭
こま人の山の形見で京を知
武蔵野も屋形〳〵にせばまりて
御上洛都の扇うりきれて
御神輿のくるか太鼓の音近き

」（三十一オ）

比丘尼まで交る卯月の茶の木畑
五六月湊にうれぬ女なし

かたじけながり嬉しがりけり
初言に乳母と召るゝ幼稚(ヲサナ)君
海の難遁れて陸の水甘し
清水の舞台を飛て死ぬ願
塀ごしに裁許の済を聞味方
御法事に去年の未進を済されて
順礼の間はさはりとゞまりて
水上は遊女の実のなさけにて
和讃ぶしなれど寺子に諷迄
見知ねど桟敷を分て置芝ゐ
高野には逆修一本おちかため
目に入し埃ねぶつてやる女郎
庭祓の杉庭入る願ほどき
銭投て三嶋を走る船祭
奉加帳我名を一の筆に付

」(三十一ウ)

」(三十二オ)

葭簾一間はおろし一間巻
二人が中に乳はなれの酌
花のよこ目もいとふ女郎衆
心のすめばおもしろき雨
今日は血を見ず神輿治る
御気をまきて雉子を馴染せ
にくや誰やら琴の連引
指のさきにて塵拾ふ人

」(三十二ウ)

道の左右は麦と茶の花
鳥居ある墓主誰ぞきかまほし
特牛も舎人が声とゞまりて
蜻蛉はちからつかぬに飛胡蝶
雀ともならで田螺のあさましや

是ほどに慰事は候はじ
起たる形に花の散あと

」(三十三オ)

凡夫に成て躍る長老
夜の花見に明がたの風呂
かへて一荷の柴を飲酒
庭艸引て自身打水
莨菪きつくは菊まぜてすへ
妻も桜に出る格日
番匠なぶる御所の女房
水の祝ひの酔は御免じ
湯女によまする傾城の文
指図と違ふ人の心根
来初たからは日々に参らん

」（三十三ウ）

同じ程づゝ間を置也
顔出して汐ふく海士の息休め
歩を先に将棊だをしの駒双べ
郊外は六十塚の有花野
吾斧の木魂すゝどき山嵐
岑入に山伏出立京の町

」（三十四オ）

息なしに六十盃の矢数呑
蝋燭を二挺碁盤に消ス力
御座船の先を引船何十艘
切捨る跡よりのびる指の先
どこやらか文台馴し吟じ声
打込のけいこにのびる太刀の先
楊弓の時には公家も同座にて
たれ見れど目鼻おかしく付にけり
穴ついて子に植さする芋畠
雛の座も女は右になをされて

」（三十五オ）

木も草も若葉〳〵に青〳〵と
くるりまはれば三里有宮
清水をしらず柴の戸の札
角なき鹿はせこもおそれず
在家は何をしてくらす雨
蝉喰蛇の落る泉水
居心のよき菴室の躰

」（三十四ウ）

ひえをやばせの船にのせけり

先ちや一ふくたばこ一ふく
世の中ようり詞にも買言葉
二十年見ざる御顔も同じ事
うれしさや心のまゝに居る石

水を見る所を夏の上座にて
月と燭とのあいは白蓮
村の布袋となぶる福人
瓜に恥かく小刀のさび
柏にのする石焼の鮎
蛙のつらにしたむ盃
ほたるが疵よ啼こゑのなき
たつるたくみの替る瀧寺
蕎麦切ののびれば何の詮もなき
二日目は長郎の有一世能
孝行の心教る師の異見

」（三十六オ）

」（三十六ウ）

よき雨と碁好のくせに書手紙
さは〳〵と行目か花の盛也

真向の顔と横向の顔
左大臣同じやう成右大臣
軍場の跡に哀は手負武者
雪吹にも火の見矢倉の戸はさゝず
扇折女はいづれ一きよう
料理場のせばきに膝を直しけり

賢ケンナル一哉カナキウ炙シヤウ相バン一伴

負のきにする慰の枕引
楽屋から見物みるも物見也
あみだ仏みかへり仏ならべ置

となりにも其隣にも向ひにも
こしらへて置奈良の鹿五器
燈籠引ぬはをとり子の親

」（三十七オ）

」（三十七ウ）

本梅の木は古き看板
杓の柄とゞく入梅のもと
土産かはせにしたる御祓

先こよりをばひねり候へ
山がらの癖を直さず籠の内
脇ざしに下緒付ずにさゝぬもの
檜物屋へ文箱を早く取に遣

」（三十八オ）

かい〳〵しさよ〳〵
雪こかしこけては起て雪こかし
板の間や忍び夫を負ふ娘
御前にて飛火を取て消小性
羽子板をうしろ廻しに幾まはし
なげつける手鞠に軽き身のひねり
万燈の油聖のさす役目
小身なとのに過たる供廻り
法論は投る香炉にやむ文句

」（三十八ウ）

鉢まきにするが子共のあやめ草
提ながら水もこぼさず切鮟鱇
一風呂に積気もはるゝ口拍子
江戸馴てかの六助が時はなし
あり〳〵とあそばす声のまりの曲
あの馬はと朝きた木うり又きたか
子を負て鎚に曲ある鍛冶が妻
姫さまをめのとが負て渡る川
すんがりとおもやの椽に立娘
茶を立る子のとしはまだ五ツ六ツ
かつぎ上人をたすくる水練し
諸座敷さらば酔せん料理人
茸狩に手柄なされし御姫さま

」（三十九オ）

こん日は大吉日にきはまりて
袴着ながら瓜とつてゐる
乗下手連も馬の一せめ
とのゝ顔よく見覚る橋

」（三十九ウ）

家中をくばる初の扶持方
桶の中よりよみがへる親
内居やはらぐ殿の十面
米かす下女が顔のきわ墨
朝むく起に拾ふ百銭

」（四十オ）

あれとつてこい
これとつてこい
あんのじやう違ふ御物のもらひ物
子をつれてこすは花野にとまりたき
ふところの内より己が髭をぬく
鮨の石軽きは味のちがふもの
幟かく絵師は寝てみつ立てみつ
公事聞の子のかたらするぬすみ物
きれかゝる堤の水を手にかゝへ
大としに仕廻て付る金の封
降雪に雀追込蔵の内
飼立て後は手代にする合点

」（四十ウ）

本阿弥の御宿申はまれな事

」（四十一オ）

かれ草に
霜うす〳〵と置わたし
箱根かぎりてとさかなき雉
只ありやうにひゞく瀧川
新発意ばかりみゆる常斎
こゆればねぶりさむる朝川
もらひ鳴する葬のかへるさ
崩したひの摂待の小屋
米粒したふ盗人の跡

」（四十一ウ）

庭は白砂青き飛石
源氏よむ子を仲人にのぞかせて
柴垣をこしてさし出す琴のはこ
隠居して百俵づゝは崩しぐひ
さつぱりとみがき輪にゆふ手水桶
子細らし一人〳〵がかく茶碗

」（四十二オ）

一番はおめて負けん田舎の碁
侍のかどはたをさぬ嵯峨の奥
さし足袋は備後面にいやしくて
元朝や鏡をかざる具足櫃
羽ぜゝりの雉子のほろゝにちる紅葉
こま鳥の声のこけるは面白き
植ながら仁王に作る梅ざくら
皷打音に角ひくかたつぶり
萱葺のみゆるは殿の涼み所か
一畳の畳にはいる聟の膳
木格子を半分仕切くすりみせ
とんぼうに手飼の猫のはらばひて
釣柿を竿一ぱいに干双べ
何某の屋敷程有松林
木葉散掃除坊主の隙もなし

」（四十二ウ）

いかい果報じゃ〳〵
盃に殿の小歌の有難き

」（四十三オ）

いつみてもこん立多し反古籠
病ぬきて又人並に見る桜
寝てゐても官□の割は備りて
傾城の果院号を付られて
一日に皆なをされぬ鏡□
奉公する人の手本に名をよびて
塔の峯一老に成おち坊主
つめりたる吉野が指の跡撫て
御加増や千石からは神の官
ころびても自然とわれぬ壷荷ひ
あのやうな和尚を御子に持給ひ
うたせたる鍛冶も我を折出来刀

」（四十三ウ）

日の光かすみの内に
おんぼりと
船の金荷に付し浮桶
衣のしめる庵の花の香
内まで花に白む釈迦堂

」（四十四オ）

江口はどこぞくはへとる人
近道をゆく王城の花
富士自慢する駿河馬かた

いかにとしてもえこらへぬ也
衆道にはとぶらひ引に引かいな
照ふりを三日いはねば長者殿
直打するくせの異見にはやねうち
世話やきにさせる無言の行一ト日

」（四十四ウ）

袈裟はくかけさはかるゝにきはまりて
次の間へ出ては□をさする足
留守なれば奥のねたみのむかふ髪
し習ひの座禅は蝿にふるかぶり
精進日（イモイ）はくれを限りの生肴
名鍛冶はいくたび打て折刀
ほうあてをさする隣の蔵の窓
二日目は同じ物きぬ皷打
ろくろくび縁のきれめにあらはるゝ

」（四十五オ）

」（四十五ウ）

身躰を棒にふる迄土丹買
入聟と合点乍もおとこ嫁
乗打の馬士に田植の関すへて
口切に去年の茶碗は出されず
をどる夜を弟に忍ぶだて姿
物置は六畳菴の贅となる
雷のひかりに夜着を引かぶり
何の其天窓はられてきくものか

」（四十六オ）

ながめやる野山〳〵に気のはれて
絶ずも人の有寄宿寺
桙の的場所化の弓ゐる
さても手軽き文庫弁当
船をあがればなをる身のゆり
ほしき小松に紙付けてをく
少酔たるひようたん（や）の酒

白梅の中に紅梅咲まじり

」（四十六ウ）

庵の綿帳出るあけぼの
大社と見えて四つ眉の神子
鎰預りのみする御魂屋
枝折戸付てやさしはなれ家
化の和尚にはこはぬ十念
弁当開く茶屋の小座敷
杖立て居る駕かきの顔

」（四十七オ）

けふは殊更あたゝかな事
町なりにはへて巻けりもめん機
奥様のお足ほどきの初桜
かり得たりから尻馬の乗心
のろ〳〵と接穂□ひに来る坊主
いつく嶋鳥居に御座をこぎ入て
男船引は女は棹をさし

」（四十七ウ）

せいの出たる手柄みへけり
一丁を今一番と乞皷

翻刻『好春自筆句集』

求聞持をくれと天狗の得さそはず
気にすいて歌の和尚と名を呼れ
御礼日に出れば殿に手を引れ
掛かへて施衆の名をかく橋の桁
廻状に点のかゝらぬ名はなくて

」（四十八オ）

玄冬素雪の暁或は
赤壁をうたひ寒笛
をふくもあり我
友は声をうたひに
つかふ

松下氏遊子

寒声や手炉抱て行橋の上
車の跡は氷二筋

秋声

」（四十八ウ）

夏の句

白雨にもどらぬ猫のもどりけり　松本氏遊子
黒雲やてつきりふろぞ一夕立　同

虻見や次手ながらの奥性寺
かみ方は蚊もやはらかに覚えけり　琴山　」（四十九オ）
五寸有竹の子掘や二尺程
竹の子や筍□皿に横渡し
竹の子や戴て出るさゞいがら
五月に真中通る堤かな
山せみは木樵計がきく物か
青梅に美人の皃のそこねけり
春の句也
世の哀鳶の巣になく蛙哉
見渡せば火の中にゐる涼み哉　」（四十九ウ）
目二ツで顔丸めたる蜻蛉哉
紅の脚布思ひきつたる田植哉　」（五十オ）

何ゆへと少もはらを
　たてずして
有卦に入日は酒でくらする　弥生

あちらへもやり
　こちらへもやる
此家に行燈一つはふそくなり　同　」（五十ウ）

あちらへも行キ
　こちらへも行ク
髭ばかり先剃給へ病あがり　琴山

はやい事かな〳〵
三王の神輿さきか八王子　遊子
風見まひ屋根屋五郎兵衛参たり　」（五十一オ）

あれ御覧ぜよあれ御らんぜよ
京馴て田舎の風はなかりけり　琴山
瓦をばおひねてあがる塔のやね　仝
小芝居に孔雀ばかりはまこと也　秋声
むづかるな殿様めすとおどす乳母　」（五十一ウ）

何よりかよりよきものぞかし

うり買にならぬは人の命也　琴山

御免候へ〳〵

川床のゆかより床へ行涼み　雲平

此座敷昼寝をするによき所　遊子　」（五十二オ）

うつくしやあらうつくしやうつくしや

かぶろのかみのそろふ首筋

何につけても思ひ出す也

町義とて後家に袴もきせられず

山の端に日はちり〳〵と入かゝり

ときはて仕まふおとの御地蔵

おかしい事と腹筋をよる

かごかきののせてあがらぬ大男　遊子　」（五十二ウ）

もち花の後はすゝけてちりぬべし　野水

はる近く搨つみかゆる茶畑かな　亀洞

煤払ひ梅にさげたる瓢かな　一髪

門松をうりて蛤一荷ひ　内習

田作に鼠追夜の寒さかな　亀洞

冬の句

へかんたり雪におされて藪の竹　松本氏遊子　」（五十三オ）

（空白）　」（五十三ウ）

花

これは〳〵とばかり花の吉野山　貞室

我まゝをいはする花のあるじ哉　路通

薄ぐもりけだかく花の林かな　信徳

花の山どことらまへて歌よまむ　晨凪

暮淋し花の後の鬼がはら　友五

山里に喰物しゐる花見哉　尚白

何事ぞ花みる人の長刀　去来　」（五十四オ）

みねの雲すこしは花もまじるべし　野水

はなのなか下戸引て来るかいなか　亀洞
下々の下の客といはれん花の宿　越人
はなの山常折くぶる枝もなし　一井
見あげしがふもとに成ぬ花の滝　俊似
兄弟のいろはあげゝり花の時　鼠弾
ちるはなは酒ぬす人よ〳〵　舟泉
冷汁に散てもよしや花の陰　胡及
はつ花に誰が傘ぞいまいまし　長虹
柴舟の花咲にけり宵の雨　卜枝
おるときになりて逃けり花の枝　鷗歩
連だつや従弟はおうし花の時　荷兮
疱瘡の跡まだ見ゆる花見かな　傘下
あらけなや風車売花の時　薄芝
花にきてうつくしく成心かな　さつ
山あひの花を夕日に見出したり　心苗
おもしろや理屈はなしに花の雲　越人
なりあひやはつ花よりの物忘れ　野水
独来て友選びけり花の山　冬松

」（五十四ウ）

」（五十五オ）

花鳥とこけら葺ゐる尾上かな　冬文
首出して岡の花見よ蛇とり　荷兮
　酒のみ居たる人の絵に
月花もなくて酒のむひとりかな　芭蕉
　ある人の山家にいたりて
橿の木の花にかまはぬ姿かな　同
　杜宇
　ほとゝぎすを飼をくものに
　もとめ得て放やるときに
鳥篭の憂目見つらん郭公　季吟
目には青葉山ほとゝぎす初鰹　素堂
いそがしきなかに聞けりほとゝぎす　釣雪
蝋燭のひかりにくしや郭公　越人
おひし子の口まねするや時鳥　松下
跡や先筆のつく野辺の杜宇　重五
ほとゝぎすどれからきかむ野の広き　柳風
　ある人のもとにて発句
　せよとありければ

」（五十五ウ）

」（五十六オ）

」（五十六ウ）

ほとゝぎすはゞかりもなき烏哉　鼠弾
晴ちぎる空鳴行やほとゝぎす　落梧
蚊屋臭き寝覚うつゝや時鳥　一髪
三声ほど跡のおかしや郭公　同
うれしさや寝入らぬ先のほとゝぎす　杏雨」（五十七オ）

淀にて

ほとゝぎす十日もはやき夜船かな　風泉
あぶなしや今起てきく郭公　傘下
くらがりや力がましきほとゝぎす　同
馬と馬よばりあひけり郭公　鈍可

たゞありあけの月ぞ

のこれると吟じられしに

歌かるたにくき人哉時鳥　大津智月」（五十七ウ）
うつかりとうつぶき居たり時鳥　李桃
うつかりと春の心ぞほとゝぎす　市山
室町や中立うりの時鳥　遊子
あいたしここれも誰ゆへ郭公　同
鑓持は聞か睨かほとゝぎす　作者不知

有明をかき立にけり杜宇　女藤
綿ぬきの中におつたりほとゝぎす　作者不知」（五十八オ）

月

かる〳〵と笹のうへ行月夜かな　十二歳梅吉
それがしも月見る中の独哉　湍水
月ひとつはひとりがちのこよひ哉　一雪
雨の月どこともなしの薄あかり　越人
けうときに少脇むく月夜かな　昌碧
やわたりの宵はさびしや月の影　市柳」（五十八ウ）
おかしげにほめて詠る月夜かな　一髪
どこまでも見とをす月の野中哉　長虹
峠まで硯抱て月見かな　任他
一ツ屋やいかいこと見るけふの月　亀洞
名月は夜明かきはもなかりけり　越人
名月やとしに十二は有ながら　文鱗
名月やかいつきたて、□く船　昌碧」（五十九オ）
名月やはたしてありく草の中　傘下
名月や鼓の声と犬のこゑ　二水

見る物は覚えて人の月見哉　野水

名月の心いそぎに

むつかしと月を見る日は火もたかじ　荷兮

いつの月も跡を忘れて哀れ也　同

名月や海も思はず山も見ず　去来

」（五十九ウ）

めいげつや下戸と下戸とのむづかしき

胡及

名月はありきもたらぬ林かな　釣雪

宵にみし橋はさびしや月の影　一髪

十三夜

影ふた夜たらぬ程みる月夜哉　杉風

朔日

くれいかに月の気もなし海の果　荷兮

」（六十オ）

二日

見る人もたしなき月の夕哉　仝

三日

何事の見たてにも似ず三日の月　芭蕉

四日

夕月夜行燈消てしばしみん　卜枝

いつか

何日とも見さだめがたや宵の月　一泉

」（六十ウ）

六日

銀川見習ふ比や月の空　鶴声

七日

能程にはなして帰る月夜哉　一髪

」（六十一オ）

雪

大津にて

雪の日や船頭どのゝ顔の色　其角

いざゆかむ雪見にころぶ所まで　芭蕉

竹の雪落て夜るなく雀哉　塵交

かさなるや雪のある山只の山　加生

車道雪なき冬のあしたかな　小春

」（六十一ウ）

初雪を見てから顔を洗けり　是幸

はつ雪に戸明ぬ留守の庵哉　越人

ものかげのふらぬも雪の一つ哉　松芳

くらき夜に物陰みたり雪の隈　二木

雪降て馬屋にはいる雀かな　鳧仙
夜の雪おとさぬやうに枝おらん　除風
雪の日や川筋ばかりほそ〴〵と　鷺汀
初雪やおしにぎる手のきれい也　傘下
雪の江の大船よりは小船哉　芳川
雪の朝から鮭分る声高し　冬文
雪のくれ猶さやけしや鷹のこゑ　桂夕
ちら〳〵や淡雪かゝる酒強飯　荷兮
はつ雪や先草履にて隣まで　路通
はかられし雪の見処あり所　野水
舟かけていくらふれども海の雪　芳川
雪降に気毒さうな猫の皃　不知作者

」（六十二オ）
」（六十二ウ）
」（六十三オ）

堀江林鴻が京羽二重と云
撰誹書其跋をこふ其
跋
堀江林鴻京華誹師の句を集て
此羽二重にかけり其遠

大のいさをしかの香林
の遠が紙衣の録と
（落丁アルカ）
そまれければ
仕り侍る
神拝や沓ぬぎ掛る霜の上　好春
丹州大はらどのへ
奉納の発句絵馬
所の衆中より
掛られ侍りけるに
予に巻頭の
句つかふまつれと
（落丁アルカ）
北野奉納三夏三万句追加
巻頭　詞書　好春
三夏三万句奉納の心ざ
しあるころほひ社頭

」（六十三ウ）
」（六十四オ）
」（六十四ウ）

にまふで丶神翁の間に
句をえたり則是を追
加の冠とするものならし
松梅にわすれず拝め白太夫

紀伊国紀三井寺の
観音奉納の絵馬
に三十三所の哥
の五文字を取て
三十三句の発句
の巻頭にふだ
らくやといふ事を
予につかふまつ
れと和歌山の
衆中より申
こされければ
つかふまつりて
つかはし侍る

」（六十五オ）

ふだらくや大悲も滝も日本一　好春

又紀三井寺奉
納の絵馬を和
歌山の衆中掛
られし歌仙俳
諧予に点つかふ
まつれとありて
其歌仙俳諧の
第三まで

」（六十六オ）

」（六十六ウ）

千本の桜の西や和歌の浦　和歌山石舟
あた丶かに踏布引の砂
春さきは遠近人のしづかにて
右ほつくの心は紀三井寺に
千本さくらうはり侍る
よしなればなり

」（六十七オ）

」（六十五ウ）

丹波綾部のあたご
山奉納の絵馬は
国守の家中より
掛給ひしに予に
巻軸の句つかふ
まつるべきよし
仰こされければ
つかふまつりて
つかはし侍る
朧夜や雲に火ともすあたご山

上御灵奉納の
歌仙誹諧の絵馬
予に追加の発句
つかふまつるべき
よし願主の
衆中よりの
（落丁アルカ）

」（六十七ウ）

好春

」（六十八オ）

」（六十八ウ）

まへ句附
其の程のはやからずして遅からず
両方から出る釈迦の正面

茶屋にきて船を詠る遠目がね
ものいふかしてうごく唇（クチビル）

かさねてもをく双べてもをく
折時はほね一ツ宛さす扇

これは〳〵と手を打にけり
見さしやんせ女ひとりに留主さして

発句
首きられ蝿はこくうににげにけり
みやくのうつほたるの尻の光哉
（落丁アルカ）
いづれぞ好春か曰別々

」（六十九オ）

」（六十九ウ）

不別　」（七十オ）

賦花何誹諧

名月や編笠もどす東山　好春
肩から下の荻の花垣　三箇
秋過る水風呂の釜紙つめて　賦山
脚達に縄をくる〳〵とまく　円佐
後より思ひがけなき鵝に追れ　一林
たゞ僊少に出入公家がた　春
色〳〵の菓子の名よせを絵にかきて　」（七十ウ）
訴訟ありげな娌の顔つき　箇
思ひ寝の足のさゝれぬ置火燵　山
からに成たる刀掛なり　佐
あか〳〵と日は朔日の朝朗　林
御湯殿ちかく参るかな井戸　春
落て有櫛の吟味の物ねたみ　箇
をどりくづれて忍ぶくらがり　山
金かりに京へ来て居る月の秋　」（七十一オ）　佐
　春

鱸膾は宇佐の祭り日　春
せう〳〵で花にも出さぬ朽木盆　箇
弟の雛ははだか人形　山
春の留主見せの世話なき竹格子　春
道理ずくめに刀ぬかせず　林　」（七十一ウ）
長老は長老程の徳有て　佐
鴛みる人の只はもどらぬ　箇
虚言ついてくるしからぬぞ神無月　林
和縮緬をば売つけにけり　春
冠きてまだ部屋住の左兵衛殿　山
針の小路の芹取にやる　佐
懐にあたゝめてゐる瓜の種　箇　」（七十二オ）
御真向掛てむく朧月　山
とし明て子飼いにたる跡わろき　春
庭内海に成し夏雨　林
面のある神輿一社を舁込て　佐
兵法づかひ杖にかくるゝ　箇
十二月煎じつめたる大三十日　林

かひをふらせて陶つめさせ　春
裙を着て取廻よき花の比　林
まだ墨の干ぬ宮の梅竹　筆

（七十二ウ）

（七十三オ）

何玉

名月やこひた所の溜り水　賦山
すゝきかいわけ手燭置石　円佐
五本鑓五本ながらに柿生て　一林
役なしに取麦出行なり　好春
一門の中には馬医の嫌はるゝ　三箇
はなかみ出して包む焼物　賦山
大橋は昔松原通りにて　円佐
気の澄たりし神の開帳　一林
衆徒連の轆轤袴を雪にきて　好春
茎漬るには階子さす桶　三箇
邪广に成袖壁頓て取てのけ　賦山
親より息子人のすく人　円佐
秋毎はとの殿の月町の月　一林

（七十三ウ）

（七十四オ）

霧間を出す深川の鯉　好春
相撲取道一ぱいにはたかりて　箇
三味線引の肩揚られ　山
伊達くらべしよまんは花の盛也　佐
飛に糞せぬ燕きれいさ　林
起すなといひ付てねる春の日に　春
酒麩は酒で煮る程がよい　箇
俄雨折敷の蓋の大和窓　山
得うらぬくれは黒木願くる　佐
つめたさの襁袍洗ふて遣にけり　林
尻屋は寺の墓とこはがる　春
半空に初音無にする郭公　箇
慮外働く僕が侘言　山
暮がたに銀座の町の行燈ふれ　佐
のこる暑さの皆に成かぜ　林
打留の月はをと子の地蔵堂　春
夜露に尼の首がまはらぬ　箇
いにしなは鞭に小猿のぶらさがり　山

（七十四ウ）

（七十五オ）

五分畳の間を問てをく　佐
幾月の御腹見えすくうき思ひ　林
乙女をどりを恥る春の日　春
咲花にあその神主幕打て　箇
雨をかすみにちんじかへけり　仝

」（七十五ウ）

」（七十六オ）

二字通音

名月や稲の花くふ鰍汁　三箇
　爰には居ぬといはす萱の戸　好春
とし〴〵にかはる木地山秋くれて　円佐
　をち合川の他国まじらず　一林
随身のあとに鍋とりつゝかれし　賦山
　一重さくらにくばる飩食　三箇
春の日の影はあたまの真上にて　春
　こんくはい見たらいなん初能　佐
新艘は二分くけりの中間船　林
　仏性なる宮の法印　山
さふあらふ蛇のねぶりし早松茸　箇
軒より先へ出たる竹椽　春
いなづまの暮には西の雲あかく　佐
　咄し上手の月にとめられ　林
内〳〵の文届ばや踊り堂　山
　妹をだますつまみやうかん　箇
ひとりでに帯のとけたる花の比　春
　杖つかぬ日はさとのあたゝか　佐
二月や不茶の列座のおもしろき　箇
　無理に一句と平家望まれ　山
降籠る雨にうるさき須广明石　林
　女中に付は白髪さぶらひ　春
うつり香のしやくりをするもきづかひて　佐
　ほらの地紋を釣てみる蚊帳　林
聞に行双ひの岡のほとゝぎす　春
　うす茶はこばす寺の金色　佐
日移りに添けのなき腰の物　山
　ふかみへつれて廻る川越　箇
いも大根寝たらば起よ秋まつり　林

」（七十七オ）

」（七十七ウ）

」（七十八オ）

月に尋る御所の傍輩　山
まぎらかす去年の九日の小袖にて　箇
す、投付し書写の上人　春
先にから片〳〵耳のなりやまず　佐
火ぎれの一ツない火燵なり　林
花見を京のもどりにつれてきて　山
手がら次第に春のことぶき　筆

「（七十九オ）

二字除沓

名月や峯にも人の立て居る　円佐
そこらは秋の明葛家也　一林
初紅葉しからぬ柴に食焼て　三箇
中間の鞠を出して風はめ　賦山
上京所〴〵の下後藤　好春
剃金やりて米を買する　佐
冬枯や鳥井の上に立鳥居　林
鑓をしるべにやつこ掘ル雪　箇
宿がへをほの〴〵明に一かへり　山

「（七十九ウ）

月見涼みに入ル簾箱　春
大徳寺いへば北派があかりにて　佐
弓箭筋にもの、つ、しみ　林
名香を髪に毎朝焼かくる　箇
小扈従部屋の双ぶ鎌の戸　山
男つきいづれか硎の木屋竹屋　春
稽古囃子の酒奉行役　佐
葉毎に花の汗かく塵埃　林
すぐろの薄手に炭がつく　箇
菴問竹の子笠の寒がへり　山
眼架が有か申受たし　春
首筋もびろどの襟はこそばくて　佐
小坊主どもの狂ふ留主の間　山
乗替の馬糞臭て笑ひけり　箇
何里をくる、八橋のより　林
高山の茶筌売にて権の守　春
木おろすまでは中戸明ざる　佐
半犬は神のながれの扶持喰て　林

「（八十オ）

「（八十ウ）

「（八十一オ）

行人噤る禁制の峯　春
翠簾幕や時〳〵御手の鳴計　山
杉原餅を出しかける月　箇
ころ〳〵と板間をこかす会津蝋　佐
医者衆のあとが町の礼也　山
俄なる雨に草履の尻をりて　箇
手にものもたぬ筈の奉公　林
鉢坊のやうな軽さでいつも花　春
松接たるは出来た才覚　筆
」（八十二オ）

他添

十五夜に田毎の月や馬の上　一林
見人出て居る松の冷　賦山
腰長押秋の時雨のかはらきて　好春
魚の尾付る竿竹の先　三箇
漬瓜の数はあくる日たしにきて　円佐
照りにも切れず美い水筋　林
山臥に髭のないこそぬかつたれ　山
」（八十二ウ）

勧進的の場はさきが時宜　春
裏の門松原までは五六町　箇
人に拝ます御車の牛　佐
けんによなやそちは子持になりやつたの　林
なさけに計りごまめ一升　山
霍乱に桃の葉の湯をあびせられ　春
仏の附て廻る修業者　箇
月雪に富士の裏国国いくつ　佐
としふる狒々の身を大事がる　林
かけ出すを取付妻の花心　山
揚銭乞の待間永き日　春
春寒み買喰したる物がくれ　箇
鳶くはへ行火縄あぶなき　佐
懐によその哀の跡とりか　林
敷居の下をくゝる多賀竹　山
碇には紙燭をはさむ筒井筒　春
取て鼠をながす赤貝　箇
」（八十三ウ）

おも役の芸は仕のきの足揃　佐
うらへ行間は守りあづくる　林
夕月に吸物の下火を引て　山
刈しまふたる惣作のわせ　春
真鍮に神輿をならす秋の風　箇
女子の手からとらぬかみしも　佐
惣領の名は大ほやよ〳〵　林
丸口鯛を犬に喰する　山
侍入て屋敷も池ももらひたき　春
こしもとゞもよみなさなへとれ　箇
花衣人のとばしり恥らひて　佐
まだ影うすき春のさかり日　筆

」（八十四オ）

」（八十四ウ）

実躰に咄しかゝるや冬籠　助叟
薬鑵の細う煮る炭の火　一林
浜びさし柱いらずにさし出して　只丸
いつふらるとも見えぬ松の木　円佐
袴着てのびしに立し月の暮　賦山

」（八十五オ）

こけてきさうな鱸振舞　好春
雑菊と思へどぬいて捨られず　執筆
また気性也水の飲口　轍士
夕立の泊瀬越を行雲の足　一林
石さへみれば庭にほしがる　助叟
手枕に浴衣きながら二廻り　円佐
かへし〴〵のわるい唐やう　只丸
うつくしき若衆のあれが兄子にて　好春
在郷すまふに出れば関とる　賦山
間板の目を尋けり宵の月　轍士
地山の匂ひ茸の芬〳〵　一林
こそ〳〵と尻のたまらぬ花の幕　賦山
国阿の杖をおがまする春　円佐
蝶〳〵が出て日和に成すまし　如叟
おそばについてだてな針女（シンメウ）　好春
鍵入て思ひ煩ふ箱の内　只丸
いびきをそしる暁の船　一林
楊枝にてかき廻したる玉子酒　轍士

」（八十五ウ）

」（八十六オ）

」（八十六ウ）

心やすさにうらからも来る　如叟
うづまさのうつしか暮の石燈篭　好春
かゆい所をこする戸のかど　賦山
雨あがりわらぢの露をねぶる犬　円佐
御香祭にあくる古道　只丸
竹棚に五器うつむけて秋寒し　轍士
たつたる跡ははかぬ夕月　一林
うつて見てゆびさすりけり大皷　賦山
坊主にせうといへばいやがる　好春
ふつゝりとわらしべきるゝ力こぶ　円佐
ものにきやがて日待とゝのふ　如叟
はら〳〵と障子明れば花盛　轍士
御紋いたゞく身の長閑成　只丸

」（八十七オ）

」（八十七ウ）

」（八十八オ）

前句附

山伏も坊主も尼も商人も
唐の土とはならぬ世の中

亦

阿柱此はしらにも火ともして
宿老どのへは石もうたれず

す、払ひの発句　好春

うわばりの丸寝あすのす、払ひ

」（八十八ウ）

望まれければ
つかはし侍る

おはらさしこりとる秋や桂川　好春

」（八十九オ）

相国寺の寺中
の屏風に公家
衆には歌を申受
僧衆其外詩人
達に詩を望み
てかゝせ誹師
には誹諧の発句
を望まれしに

」（八十九ウ）

予に桜の句を
望まれ侍りて
桜がり児の名問ん酔ぬうち

京の誹師三十六人
をえらみて歌仙と
して集出されし
よし予もその
一人のよしにて
其句

秋の夜や下かはらけの油さす

此歌仙集の事
予にしらされし
ならばつかはし
たき句も有し
に夢にもしら
ざりしかば
ぜひなくこそ

好春

」（九十オ）

」（九十ウ）

池西言水稲荷
奉納の発句屏
風に予にも発句
望まれしかば
仕りてつかはし
侍る

たつみからうしとらまでの桜かな

右の屏風神楽
堂に在しと也

好春

」（九十一ウ）

」（九十二オ）

歓修寺御門守様の
御庭拝見仕候とき
とり持の御衆中
ほつくせよと仰
られければつかふ
まつり侍る時は
さくらの比なりければ

」（九十一オ）

」（九十二ウ）

遠国のものとて入ぬ御所桜　好春　」（九十三オ）

備後の霞舟と
いふ誹好士のかた
より絹地に
墨絵にて大黒
書たるに讃に
ほくせよと望
こされしかば
かきてつかはしける
子まつりやたつてまもつて居てまもれ　好春　」（九十三ウ）

［□翁］　」（九十四オ）

于時元禄十年
強圉大奮若除捻
向陽堂好春書
［□堂］　」（九十四ウ）

（白紙）　」（九十五オ）

（白紙）　」（九十五ウ）

（白紙）　」（九十六オ）

とつくりと梅いけなをす初日かな　」（九十六ウ）

（白紙）　」（九十七オ）

秋夕和歌

仮にだに人はとひこずはし鷹の
とやまのいほの秋の夕ぐれ
つらきにもうきにもあらずなどされば
世にいひしらぬ秋のゆふぐれ
とにかくに身をばはなれぬうき事も
いまひとしほのあきの夕ぐれ
かぎりなき思ひよされば大かたの
うきに数そふ穐の夕ぐれ
哀さぞと思ひやるにぞなぐさむる
こゝろある身のあきの夕暮
さしでこふる人はなけれど天津空
雲のはたてのあきのゆふ暮
ながめてはなぐさみぬべき山のはの
月だにおそきあきの夕ぐれ　」（九十七ウ）

山里の槙の葉そよぐ風の音に
ながめじとても秋のゆふぐれ
わきてなど身にはしむらんいつかはと
ときはのやまのあきの夕ぐれ
うきながらたえて六十の世をばへぬ
よしやさもあれ秋の夕ぐれ
あはれてふならひぞつらきむかしたが
ながめそめけん秋のゆふ暮
四のときうつらぬ国に生れなば
よそにや見まし秋の夕くれ
ことしげき世をば心とそむきらん（ママ）
人やりならぬあきのゆふ暮
世のうきは山路ふかくものがれきぬ
そむきかたなき（ママ）秋の夕ぐれ
わきてなどながめわぶらん身ひとつに
かぎるそらかは秋の夕ぐれ
老の身のかはるにかはるこゝろかな
秋はむかしの秋のゆふぐれ

」（九十八オ）

淋しさも実は此世を捨はてぬ
心づからの秋のゆふぐれ
山ざとにつねはいとひし人めさへ
またずしもあらず秋の夕暮
うきにたえていつまで世にはありま山
いなや又こん秋のゆふぐれ
葎だに八重にかさなるあしの屋の
こや思ひそふあきのゆふぐれ
いかなれば花さく春をよそにみて
心よせけん秋のゆふ暮
時しもあれ萩ふく風をさほしかの
こゑをつたふるあきの夕ぐれ
吹返す葛のうら風是もまた
うらみよとてや秋の夕ぐれ
わが袖の露だに余る思ひぐさ
尾花がもとの秋の夕暮
あだ物と思ひも果ぬ露の身の
たえてつれなき秋の夕ぐれ

」（九十八ウ）

」（九十九オ）

うかりける世には心をのこさじの
ねがひにかなふあきの夕ぐれ
ながらふるたゞわれからのながめ哉
もにすむゝしの秋の夕ぐれ
寂しとも誰にかたらん山ざとに
老て友なき穐のゆふぐれ
荻の葉の露ふく風よ聞につけ
みるにつけても秋の夕暮
わが宿は山陰なれどいとゞしく
さびしさいそぐ秋のゆふ暮
いかにせん鹿のこゑきく時はきぬ
身はおくやまの秋のゆふぐれ
野辺の虫うらみはさぞな我だにも
音にたてつべき秋の夕ぐれ
あはれ知数にや人も思はんと
思ふもかなし秋の夕ぐれ
三輪の山さらでも独杉の門
たれかはとはむ秋のゆふ暮

」（九十九ウ）

月のみに老はかぎらずながめきて
つもれば人の秋の夕ぐれ
青つゞらはいりのこやの道をなみ
くる人みえぬあきの夕ぐれ
をく露にのべの草木もしほるれば
わが袖のみか秋の夕暮
数ならでおろかなる身の心さへ
千々にくだくる秋のゆふぐれ
わりなしやかなしき本の一かたに
定めもあへず秋の夕ぐれ
身ひとつになげく比かないへばえに
いはねばとても秋の夕ぐれ
くれ竹のうき世の外に悲しきは
いかなるふしぞ秋の夕ぐれ
ひたぶるの岩木にさらば身をなして
いざこゝろ見む秋のゆふぐれ
草葉にも露はやどりぬいづくにか
この身をおかむ秋のゆふぐれ

」（百オ）

朝がほの花ものいはゞとひてまし
なれはしらずな秋の夕ぐれ
いとゞなを雨となりてもさびしさの
けしきは同じ秋の夕ぐれ
ながめじと思ひすつれど兼て我
心にしめし秋の夕ぐれ
いかなればうきに哀の添ぬらん
こゝろひとつの秋の夕ぐれ
わすれなむとすればかゝる心哉
あないひしらずあきのゆふ暮
なれだにも鳴音はよきよ天津厂
もの思ふ宿の秋の夕ぐれ
月をだにまたで心や尽すべき
木の間さびしき秋の夕ぐれ
せめてさは待向はじと思ふとも
なみださきだつ秋の夕暮
うき物といつよりなれる習ひぞと
心にとへばあきのゆふぐれ

」（百ウ）

」（百一オ）

翻刻『好春自筆句集』

さのみまたうからぬ物と人はいざ
思ひやすらんあきのゆふぐれ
淋しさのながめに余る袖の露を
人なとがめそ穐の夕ぐれ
かけてさは思ひしことよ露ながら
木のはふりしく秋のゆふ暮
あすしらぬ老が身に添思ひかな
あやしやいかに秋の夕ぐれ
世を背く身のいつはりと成にけり
ながめがちなる秋のゆふ暮
いつとなく思ひはたえぬ身のうさに
なれずはいかに秋のゆふぐれ
木にもあらず草にもあらず何故の
思ひぞされば秋のゆふぐれ
思ふ事かなふべく共老が身は
いまいく程ぞ秋のゆふぐれ
六十までいかでたえけんかくばかり
へがたくみゆる秋の夕暮

」（百一ウ）

ながめわびこは何事のゆへとだに
しらぬもかなし秋の夕ぐれ
うしと思ふ心に身をや恥ざらん
いのちながさの秋の夕ぐれ
ひとり住みやまのなげきこるとても
いかゞはすべきあきのゆふぐれ
年毎のながめにたえて存らふる
みをもかこたん秋のゆふぐれ
ながらへて猶や忍ばんこのごろの
うきは限りの秋の夕ぐれ
憂にそふ哀れよいざや限りある
いのちもしらずあきの夕暮
さすがまたけふゆく末になりぬとも
思はざりけり秋のゆふぐれ
露にしなへ風にうらぶれ草も木も
同じ心の秋の夕ぐれ
松かぜにをとする方を眺れば
人もこずゑの秋のゆふぐれ

」（百二オ）

」（百二ウ）

心やる方こそなけれ野も山も
つゆ置しける秋のゆふ暮
いでさらばあるにまかせむうしといふも
身を思ふゆへの秋の夕ぐれ
かくまでの哀はむかししらざりき
世はならはしのあきの夕ぐれ
いかにして人だにとはぬかくれがに
たづねきぬらん秋の夕ぐれ
やどはあれて独ながめを菅原や
ふしみのさとの秋の夕ぐれ
いつの間に身は老ぬらんつれ〴〵の
ながめにかはる秋の夕ぐれ
志賀の浦「の」見消や風の行衛を白浪の
あとなきかたの秋のゆふぐれ
しら浪の猶こりずまにたちかへり
あはれとぞ思ふ秋のゆふ暮
われのみに限るながめか世中は
かくこそありけれ秋の夕暮

」（百三オ）

さのみかくながめざらまし哀てふ
ことだになくは秋の夕ぐれ
浅茅生のをの丶しのはら忍べども
思ふにまくる秋の夕ぐれ
老らくの袖に露さへをき添て
なみだひがたき秋のゆふぐれ
あやしくもながめにまよふ心哉
しらぬ山路の秋のゆふぐれ
わかれつる暁ばかりうき物と
何思ひけん秋のゆふぐれ
こりずまに今としも又や詠べき
人にくからぬあきの夕ぐれ
あはれてふながめばかりや年をへて
身にはかはらぬ秋の夕ぐれ
ながむとはさのみ思はぬ空にしも
身をしる雨の秋の夕ぐれ
うき事の数そふのみは偽りの
なき世なりけりあきの夕ぐれ

」（百三ウ）

」（百四オ）

ことしげき宮古は扨も山ざとに
ひとりある人の秋のゆふぐれ
心から背き丶ぬれど淋しさの
ことはりすぐるあきの夕ぐれ
いつもきく風の音さへ此ごろは
いかにふけばか秋の夕ぐれ
山深みひとりおりたく柴の戸の
けぶりもほそき秋の夕ぐれ
玉のいさうてなはしらず八重葎
つゆさへしげき秋の夕ぐれ
いとゞしく便の風ぞ身にはしむ
ふるさと思ふあきの夕ぐれ
かぎりなき泪よされば我袖に
のこるかこぞの秋のゆふぐれ
ひとりすむまやの軒ばの忍ぶ草
あまりさびしき秋の夕ぐれ
さらぬだにかぜにまかする露の身の
をき所なきあきのゆふぐれ

」（百四ウ）

何とうき身をもかこたむこれのみぞ
わがとがならぬ穐の夕ぐれ
心からけだに思ひよ夏むしと
何かいひけん秋の夕ぐれ
人めなき袖にも露はおく山の
岩のはざまの秋の夕ぐれ

」（百五オ）

色も香もさのみ心にそむなとは
人にぞいひし秋の夕ぐれ
おほかたの世のうきことは身になれぬ
なれてもうしや秋の夕ぐれ
いかにせむ風をまつまの露の世に
きえぬうきみの秋の夕暮
その事と思ひも分てながむるは
いかなる色ぞあきのゆふぐれ
とにかくにながめよとてや露をくさ
なみだを袖の秋のゆふぐれ
おぎの葉に過ゆく風の音ならで

」（百五ウ）

とへかし人のあきの夕ぐれ
有間山いなのさゝぶきいなとても
いづちゆかまし秋の夕ぐれ
淋しさのながめにたえぬうたゝねに
おやのいさめし秋の夕ぐれ
よしの山入べき春の有ましも
うつればかはるあきの夕ぐれ
人めなき草の庵の三のみち
それさへあるゝ秋の夕ぐれ
さびしさにむかへばいとゞますかゞみ
しらぬ翁のあきのゆふ暮
白露の玉田よこ野に鳴むしの
ねにこそたてね秋の夕暮
をくつゆも鶉の床に深草の
さとをばかれぬ穐の夕ぐれ
池水のいひこそしらねつの国の
こやもの思ふあきの夕ぐれ
世をいとふ習ひは嘸と思ふ身に

」（百六オ）

」（百六ウ）

あまりさびしき秋の夕ぐれ
身ひとつのうきにも人のつらきにも
あらぬ思ひよ秋の夕ぐれ
そことしもしらぬ山路の鳥のこゑ
それさへさびし秋の夕暮
何事もあらずなり行むかしより
おもがはりせぬ穐の夕ぐれ
ながゝれと身をいのりしは限りなく
ながめんためか秋の夕暮
ならはしの物ともいはゞ身はすでに
六十に余る秋のゆふぐれ
だれにうれへ何にかこたんながむれば
そのことゝなき秋のゆふぐれ
残なく思ひも露も身にあまる
袖より外のあきの夕ぐれ
わすれてはさびしとぞ思ふ六十余り
身はことはりの秋のゆふ暮
初よりむなしきみちをさとりえて

」（百七オ）

翻刻『好春自筆句集』

ことなしぶとも秋のゆふぐれ
いかなれば身はかくしもがしもながら
心そらなる秋のゆふぐれ
淋しさのまぎるゝかたと思ひよる
こゝろぞやがてあきの夕ぐれ
うしといひあはれといふも身を思ふ
心の外のあきの夕暮
山ざとにくらべくるしきさびしさの
よのうきよりは秋のゆふぐれ
仙人もいかにたえては過しけむ
九千とせの秋のゆふぐれ
さびしさのゆへだにしらず人の上の
ことならなくにあきの夕ぐれ
年〳〵のながめせしまにいつしかと
身は七十の秋のゆふぐれ
まれにきて思ふ人もなし八十まで
いくたの森の秋の夕暮
空たかくつらにをくるゝ鳫の声

」（百七ウ）

」（百八オ）

そをだによきよ秋の夕ぐれ
あま衣なればまさらで芦の屋の
なだの汐やの秋のゆふぐれ
波の音に絶てや須广のあま衣
かゝるところのあきの夕ぐれ
露けさのさこそはあらめ旅衣
なれたる里の秋の夕ぐれ
思ひやるかひもあらじなさびしさは
ひとり〳〵が秋のゆふぐれ
身ひとつのうきに限らばいかならん
むかしもさぞなあきの夕ぐれ
うき事にさすが絶つゝ昔より
いくながめしつ秋の夕ぐれ
とにかくに世はうき物とながらへて
よしなやさればあきの夕ぐれ
所せく咲ちる花の春はあれど
よしやよしの、秋の夕ぐれ
さびしともうしとも何かいける身に

」（百八ウ）

心あればぞ秋のゆふ暮
ゆくゑだにしらぬ野山にあくがれて
ふるさと遠き秋の夕ぐれ
何ゆへに世をのがれ来しわが身共
思へばこそあれ秋の夕暮
山里の軒ばにちかき松杉も
霧立こむる秋の夕ぐれ
さすがまたまぎるゝ事も有なまし
わがやどからの秋のゆふぐれ
まれに来てとふ人帰る淋しさの
わが身にのこる秋の夕ぐれ
淋しさも老てはいとゞ見し人の
なきが数そふ秋のゆふぐれ
まれに来てとふ人もなき山里の
あるじがほなる秋の夕ぐれ
柴の戸のかきねとびかふ村すゞめ
おのが色さへ秋のゆふぐれ
うらとをくゆきゝの船もこぎ過て

」（百九オ）

」（百九ウ）

あとなき波の秋のゆふぐれ
大かたの世のうき事は年をへて
思ひもしりぬ秋の夕ぐれ

此秋百五十首和歌作者
南柯松本氏保勝秘蔵して
見せけるを恋望して写し
侍るなり
于時元禄六年梅天下浣寂峯」（百十オ）

［月明／荘］（朱文方印）」（百十ウ）